

林原美術館NEWS

平成13年4月1日 Vol.1

平成13年度 林原美術館展覧会等

常日頃、林原美術館の展覧会を御観覧いただき
とともに、種々の面で御支援いただいております
皆様には心から御礼申し上げます。

林原美術館の「友の会」は、これまでも多くの
方々の御入会を得て、美術館に親しんでいただ
くこととなり、今年も二十一世紀を迎え
た記念すべき年でもあり、これを機会に本年四月
からこの友の会をリニューアルし、新しい展開を図
るべく計画しております。内容としては、友
の会会員証で同伴者一名様企画展無料入館や、
特別展・グッズの割引など特典の充実を図ると
ともに、友の会の皆様との連絡を密にするため美術
館ユースを発行することといたします。

このユースはとりあえず年一回の発行とし、年間
に行われる展覧会の概要や所蔵品の御紹介、学
識者のメッセージなどを掲載し、皆様への的確な情報

提供により、美術館活動への御理解をいただける
ような内容を考えております。

平成十三年度は、春四月からの東京国立近代美
術館の所蔵する川合玉堂（かわいぎょくどう）「行く春」など、近代日
本画の名作十数点を含む展覧会や、陶芸におけ
る二十七人の人間国宝の展覧会など、特別展の
充実を図ることといたしました。また、美術講演会
や美術探訪の旅も夏・秋それぞれ充実した形での
実施を計画しております。

本紙は美術館ユース第一号となりますが、この
ユースにより美術館の活動内容に御理解を賜り、
新しい友の会にも是非御入会いただきまして、今
後とも林原美術館へのさらなる御支援を賜りま
すよう、お願い申し上げます。次第であります。

（館長 西崎清久）

第34回 林原美術館夏季美術講座

講座内容 人間国宝の父を語る

「山本陶秀を語る」

備前焼作家 山本 雄一氏

平成13年6月16日(土)

「藤原 啓を語る」

備前焼作家 藤原 敬介氏

平成13年6月23日(土)

「金重陶陽を語る」

備前焼作家 金重 晃介氏

平成13年7月7日(土)

第3回 伝統工芸探訪の旅

第1回 「現代備前刀」

平成13年9月22日(土)

第2回 「染織の世界」

平成13年10月14日(日)

第3回 「ガラス模様」

平成13年11月11日(日)



重要美術品 桐鳳凰図屏風(右隻・部分)

特別展
「人間と自然 - 移ろいと彩り」
4月22日(日)~5月27日(日)

特別展
「20世紀の陶芸 - 人間国宝の世界展」
6月10日(日)~7月29日(日)

特別展 「大名 その華麗な時代
林原美術館の名宝」
特別展観 遠州茶道宗家 紅心
小堀宗慶によって新世紀によみがえる
「きれいはび」
9月14日(金)~11月4日(日)

企画展
「林原美術館名品50選展」
11月11日(日)~12月16日(日)

企画展
「日本近世の華」
平成14年1月4日(金)~3月3日(日)

特別展「人間と自然 移ろいと彩り」

4月22日(日)～5月27日(日)

「人間と自然」はいつの時代も画家にとって、重要なテーマであると言えるでしょう。今回は重要文化財である川合玉堂の「行く春」をはじめとして、横山大観、菱田春草、下村観山などの作品12点と近・現代の陶芸作品を東京国立近代美術館の特別出展として展覧します。これに当館所蔵の近代日本画を加え、四季の移ろいと彩りを感じ取っていただければ幸いです。



下村観山「木の間の秋(右隻) 東京国立近代美術館蔵

特別展 20世紀の陶芸 人間国宝の世界展

6月10日(日)～7月29日(日)



十三代 今泉今右衛門 色絵薄墨草花更紗文蓋付瓶

20世紀における陶芸界の人間国宝(正式名称・重要無形文化財保持者)は27人です。今回はその代表作約160点を一堂に集めての特別展です。巨匠たちの陶芸作品に加え、同時期の作家たちとの交遊の中から生まれた共作や、余技の書画なども約40点展示します。21世紀に伝える技と美を、それぞれの作家の個性的作品を通して見ていただく陶芸展です。

特別展「大名その華麗な時代 林原美術館の名宝」

特別展観 遠州茶道宗家 紅心 小堀宗慶によりて新世紀にみえがえるきれいさび 9月14日(金)～11月4日(日)

備前池田家に伝わる衣装、遊具、屏風、蒔絵などを通じて、大名の華麗なる生活を現代に再現します。同時に遠州茶道宗家 紅心 小堀宗慶氏が当館所蔵の美術品の意匠をもとにデザインして、現代の名工の手で甦った器、壺、箱など35点も特別展示します。長く受け継がれてきた名品と新たに生み出された作品との響き合いをお楽しみください。



太閤消息及び大名花押古判張合 料紙箱 中谷光哉作



竹菱葵紋蒔絵厨子欄飾

企画展 「林原美術館名品50選展」

11月11日(日)～12月16日(日)

刀剣・能装束・蒔絵・絵画・陶磁器など多岐にわたる当館所蔵品の中から、国宝・重要文化財・重要美術品に指定されている名品50点を選んで展覧します。10年に一度の所蔵品による名品展です。

企画展 「日本近世の華」

平成14年1月4日(金)～3月3日(日)

桃山時代から江戸時代にかけては、大変華やかで、細かな技巧にも富んだ屏風や絵巻が描かれ、調度類が作られました。江戸時代を中心にして、「華」のある作品を御覧いただきたいと思えます。



趙浙筆 重要文化財 清明上河図(部分)



平家物語絵巻 巻第九下 坂瀨(部分)

私の大切な林原美術館 コレクションの一点

綾杉地獅子牡丹葵紋蒔絵調度

徳川美術館普及課長 小池富雄



綾杉地獅子牡丹葵紋蒔絵調度の内 厨子櫃(下図右端拡大図)

昭和五十九年秋、林原美術館の開館二十周年特別展として、大名婚礼調度展が開催された。徳川美術館からは国宝の初音蒔絵調度(当時は重要文化財)をはじめとして尾張徳川家に伝来した代表的な婚礼調度が出陳展示された。東京国立博物館、京都国立博物館や寺院、個人コレクションからも名品が出陳されて展示室が埋め尽くされた。婚礼調度の優品を多数収蔵している林原美術

館の記念すべき特別展にはふさわしい、夢のような企画であった。当時、東京国立博物館漆工室長荒川浩和氏、京都国立博物館灰野昭郎氏、同じく切畑健氏ら大先輩による展覧会のお手伝いがあり、筆者も駆け出しの学芸員として、図録執筆や展示作業に参加させていだいた。

林原美術館の代表作は、綾杉地獅子牡丹葵紋蒔絵調度と呼ばれて、大名婚礼調度の代表作の一つである。貝桶や合わせ貝、棚や鏡台などの二十点ほどの主要な調度品が残されている。三葉葵の紋が散らされて、百獣の王の唐獅子と、咲き誇る百華の王牡丹の株が全体に蒔絵で表されている。通常、蒔絵の図様は黒漆地や朱漆地の無文様の地に絵画的に表されるが、この調度の意匠では、金や銀、梨子地など色や表現を変えた稲妻型の綾杉地文様の上に獅子

牡丹文様が表されている。いわば全面蒔絵と呼んでよい。織物のような繰り返しは皆無であり、仔細に見れば、唐獅子や牡丹の姿など、どれを見ても同じ形は無い。意匠、技法ともに極めて豪華に贅沢を尽くした仕様である。まさに武家文化の最も豪華な遺産が、大名婚礼調度である。しかし婚礼調度とは、女性個人の財産のゆえに死後は、近親者で分けられ散逸する宿命であった。そのため、まともに残る例が少なく本来の持ち主の名前や、婚礼の年代、すなわち製

作年代が正確に伝わることも稀である。歴代藩主が領土や居城などと同じく、名刀や茶の湯道具など宝物の、表道具を嫡男から嫡男へと相続したのと比べれば、奥道具は対極にあり、謎に包まれている。

この特別展では、林原美術館の綾杉地獅子牡丹葵紋蒔絵調度の貝桶や棚などのすべてと京都・東福寺の同名調度の飲食器が並べて展示された。林原美術館の所蔵品は池田光政の夫人の勝姫婚礼調度とされていた。東福寺の分は、光政の娘の輝姫が三代將軍家光の養女となり、公家の一条家に嫁入りしたときの婚礼調度と推定されていた。展示はされなかったが、水戸徳川家にも櫛箱があり、こちらは水戸黄門で知られる光圀の夫人の所有との添え書があった。つまり同じ綾杉地獅子牡丹蒔絵の意匠で、技術的にも同じだが、所用者が違うためにそれぞれの婦人の婚礼調度とする製作年代も二十一年間の幅を想定する必要があった。三代將軍家光の時代、大名婚礼調度が黄金期を迎えていた当時に、將軍家お抱えの蒔絵師幸阿彌家が、同一デザインの調度をあちらの姫、こちらの姫に既製服のように誂えるのだらうか、との疑問が筆者に残った。

牡丹文様が表されている。いわば全面蒔絵と呼んでよい。織物のような繰り返しは皆無であり、仔細に見れば、唐獅子や牡丹の姿など、どれを見ても同じ形は無い。意匠、技法ともに極めて豪華に贅沢を尽くした仕様である。まさに武家文化の最も豪華な遺産が、大名婚礼調度である。しかし婚礼調度とは、女性個人の財産のゆえに死後は、近親者で分けられ散逸する宿命であった。そのため、まともに残る例が少なく本来の持ち主の名前や、婚礼の年代、すなわち製

作年代が正確に伝わることも稀である。歴代藩主が領土や居城などと同じく、名刀や茶の湯道具など宝物の、表道具を嫡男から嫡男へと相続したのと比べれば、奥道具は対極にあり、謎に包まれている。

この特別展では、林原美術館の綾杉地獅子牡丹葵紋蒔絵調度の貝桶や棚などのすべてと京都・東福寺の同名調度の飲食器が並べて展示された。林原美術館の所蔵品は池田光政の夫人の勝姫婚礼調度とされていた。東福寺の分は、光政の娘の輝姫が三代將軍家光の養女となり、公家の一条家に嫁入りしたときの婚礼調度と推定されていた。展示はされなかったが、水戸徳川家にも櫛箱があり、こちらは水戸黄門で知られる光圀の夫人の所有との添え書があった。つまり同じ綾杉地獅子牡丹蒔絵の意匠で、技術的にも同じだが、所用者が違うためにそれぞれの婦人の婚礼調度とする製作年代も二十一年間の幅を想定する必要があった。三代將軍家光の時代、大名婚礼調度が黄金期を迎えていた当時に、將軍家お抱えの蒔絵師幸阿彌家が、同一デザインの調度をあちらの姫、こちらの姫に既製服のように誂えるのだらうか、との疑問が筆者に残った。



綾杉地獅子牡丹葵紋蒔絵調度の内 厨子櫃(部分)

結論を導き出した。その後、鏡の専門家や内容品の象牙製品の研究者からも、慶安二年(一六四九)輝姫婚礼調度とする筆者の説を肯定する見解が出された。しかし、伝来過程や製作の詳細は完全に解明されたわけではない。多くの他の婚礼調度を調査して、編年や位置付けなどの研究をさらに進める必要がある。筆者の、近世大名婚礼調度の研究を、生涯にわたるテーマに導いてくれたのが綾杉地獅子牡丹葵紋蒔絵調度である。

林原美術館の名品から 源氏物語図屏風

紫式部によって書かれた『源氏物語』を絵画化したものを「源氏絵」と呼ぶ。源氏絵と言えば、十二世紀に製作された国宝「源氏物語繪巻」（名古屋・徳川美術館及び東京・五島美術館に分蔵）が、現存する最初の作例としても有名である。これ以後、源氏物語繪巻の絵画化そして工芸意匠化は、近世に至るまで続けられる。

今回ここで紹介する当館所蔵の「源氏物語



源氏物語図屏風(右隻・部分)
六曲一双 江戸時代 17世紀 紙本金地著色 各170.0cm x 373.6cm

図屏風」も同じように絵画化された作品である。当館にはこの他に十点の源氏絵の屏風が所蔵されているが、その中でもこの屏風は保存状態も良いほうであり、池田家の伝来品としても貴重なものである。一般的に源氏物語図屏風には二種類ある。一つは『源氏物語』の一場面を大きく左右一隻ずつに描くものであり、もう一つは、源氏絵を画帖や色紙に描いたものの中からいくつか場面を選び、各隻に金雲で区切りながら描いたものである。当館の「源氏物語図屏風」は後者の種類に属する。

六曲一双のこの屏風では、左右両隻とも画面を金雲によって三段に分け、それぞれをさらに木や池(海)などで自然と区切ることによって巧みに場面を転換させている。例えば、右隻右端下部には「空蟬」の場面として空蟬と軒端の萩が囲碁をしているところを見源氏が描かれ、左隻右端上部には「玉鬘」の場面として源氏が女性たちに贈る衣装を紫の上と共に選んでいるところが描かれている。また、右隻中央右上には源氏絵の各場面の中で最も好まれるものの一つ「若紫」の場面が描かれている。この場面は「若紫」の典型的な構図であり、桜の花が咲き誇る中、

美術館 友の会」のご案内

林原美術館では十三年度(平成三十三年四月一日)より、「友の会」を改革し、組織や活動内容を刷新します。

会員の特典として、企画展の入館料無料

料・特別展の入館料割引のほか、各種の

館外学習を企画いたしております。また、

この美術館「ユース」も年二回郵送いたします。

その他に、当館オリジナル・グッズも

会員割引でお求めいただけます。新グッズとしてレターセット(二種)・一筆箋(三

種)も販売しております。入会の申し込み用紙、詳細を記載しました冊子は美術館にございますので、お気軽に館員にお申し付けください。

なお、「友の会」の入会につきましては、

四月一日から五月末日まで受付をいたしますが、会費は今年度の初めから入会の場合と同様となりますので、あらかじめ御了承の方お願いいたします。

雀を追って出てくる女性たちとそれを垣間見る源氏が描かれている。雀は上部の金雲の中に描かれ、雀には赤い紐が結ばれている。これが取れて逃げてしまったのだろう。作品全体を通じて金と緑の色のコントラストが美しい。

作者については、各隻に捺されている

「宗貞」の鼎印(壺の形をした印)から狩野

派の画家によるものと考えられている。宗

貞は江戸末期に記された画家伝記である

『古画備考』にその名が出てくるが、詳しい

ことは知られていない。この屏風は作風のほとん

ど知られていない宗貞の一作例と考えられる。このように作者の面からも貴重な作品

であり、江戸時代の華やかな感じがうかがえる。

(学芸員 谷原 もえぎ)

編集後記

昭和39年に開館して以来、皆様と共に歩んでまいりました林原美術館友の会を、21世紀を迎えた本年、リニューアルいたしました。そして、これまで以上に、皆様とのパイプを強化すべく会報誌「林原美術館ニュース」(年2回発行予定)を作成することいたしました。そして、本号は記念すべき創刊号ということで皆様のお手元にお届けさせていただきましたが、如何でしたでしょうか。

面嶋館長の挨拶から始まり、年間展覧予定や美術講座等の企画案内の他、創刊号にふさわしく、特別に徳川美術館の小池富雄普及課長に当館所蔵の「綾杉地獅子牡丹菱紋繪調度」について執筆していただきました。また、当館学芸員による「林原美術館の名品から」コーナーでは池田家伝来品の「源氏物語図屏風」をとりあげてみました。『源氏物語』と言えば、知らない人はいないくらい有名な作品で、その屏風も数多くあります。その中でも当館のものは大変出来のよいものだと思います。今後は、名品は勿論、珍品も取り上げていく予定です。

お読みになってのご感想・ご意見の他、投稿等も心よりお待ちしております！ (S&T)